梅鶯仏教壮年会報

第195号
2025年
7月13日

7月例会

期日：7月27日（日）
夕刻5時～6時

プログラム
お勤め
法話
『あたりまえから
お蔭さまへ』
仏教讃歌斉唱

その一言が、知らず知らずに
人を傷つけることもあれば、
人生のどん底にいる人を
救うこともある
言葉って本当に大切だね

それゆえ、阿弥陀如来は
「南無阿弥陀仏」という
言葉となって、
私の生命の生き往く先を
説いてくださるんだ

（質問）お勤めの最後の回向句「願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国」の正しい意味を教えて下さい。

浄土真宗では阿弥陀さまが本願力をもって、その功徳を衆生（私達）にふりむけられることを「回向」（えこう）といいます。

仏徳を讃えて詠まれる偈文の中で、特に阿弥陀さまの回向を讃える箇所を「回向句」「回向文」と呼び、私達がお勤めする日常勤行でも最後にこの回向文をお勤めします。

私達がお勤めする回向文はいくつかありますが、その代表的な回向句がご質問の「願以此功徳　・・・」です。この回向句は善導大師が書かれた観経疏玄義分（かんぎょうしょげんぎぶん）の巻頭に示された「帰三宝偈」と呼ばれる仏徳讃嘆の詩の最後で詠まれているご文です。

訓読しますと「願わくはこの功徳をもって、平等一切にほどこし同じく菩提心をおこして、安楽国に往生せん」となり、意味は「阿弥陀如来様はこの尊い本願の功徳を、わけへだてなく人びとに伝え、共にお浄土に生まれたいという思いを起こさして、お浄土に往生することを願われています」ということです。善導大師は阿弥陀さまの固い決意と願いを述べられているのです。

（質問）法事のお勤めのローソクは何色ですか？赤白の使い分けを教えて下さい。

浄土真宗の法要に使う和蝋燭には4種類の色（白、朱、銀、金）があり場面によって使い分けています。

本願寺派（西本願寺）の法事では、三回忌まで白、七回忌以降は赤を使います。法事で赤を使う理由は「故人の命日をご縁に親戚縁者が阿弥陀様の前に集まり、お念仏の教えを味わうことができる喜ばしいこと」という意味だと言われています。また白を使う理由は家族が亡くなった後のグリーフワーク（大切な人を亡くした悲しみを乗り越える）の期間と考えます。

題材法話

浄土真宗のみ教え㉔
「かならず再び会う」

＊拝読「浄土真宗のみ教え」の32頁をお読み下さい。

前号からのつづき

私達は、阿弥陀さまの本願のはたらきによって、共に浄土に生まれ仏と成り、懐かしい人たちと再会することが出来ます。仏教・浄土真宗の究極の目的であり最大の拠り所であります。

人生には限りがあり、人とは必ず別れなければなりませんが、そんな切なく悲しいのちにおいても「かならず再び会う」世界を持たせて頂くというは、人生が豊かではないでしょうか。

○けれども

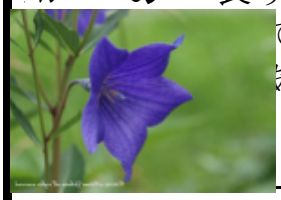
界で考えれば「好きな人には会いたいが、嫌いな人には会いたくない」となってしまいます。

『憎い人間がいるのか？それとも憎い人間と思っている自分がいるのか？』という問いかけがあります。

自らのこだわり、囚われの心が憎しみの心となります。

また、私達が言う「良い人」というのは往々にして「私にとって良い人」であり、「悪い人」は「私にとって都合の悪い人」というように、何かの拍子に逆転することもあります。

このような思いはすべて我執の世界であり、煩悩の延長らないのです。



○人間世界では

さらに、皆かれた「性格」に「生い立ち」や「社会環境」が加わり、さらに時代背景等が絡み合い大罪人が生じたと考えるのです。つまりすべて「縁」によるのです。

歎異抄の中で親鸞聖人は『よきこころのおこるも、宿善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも悪業のはからうゆえなり』『さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし』（第13条）と端的に仰っておられます。

私達は縁によって良いこともするけれど、どんな悪いことをしでかすか分からない危うい存在です。

○仏と成って会うこと

お浄土で倶会うのは、互い

それは、持って生まれた「性格」に「生い立ち」や「社会環境」が加わり、さらに時代背景等が絡み合い大罪人が生じたと考えるのです。つまりすべて「縁」によるのです。

歎異抄の中で親鸞聖人は『よきこころのおこるも、宿善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも悪業のはからうゆえなり』『さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし』（第13条）と端的に仰っておられます。

私達は縁によって良いこともするけれど、どんな悪いことをしでかすか分からない危うい存在です。

○お浄土での在り方

そのお浄土について経典では「色もなくかたちもましまさず」とありますが、それは何もないということではなく、何の色にでも何の形にでも自在になれるという世界、こだわりのない世界ということでしょう。青色は黄に、黄色は赤く、白色は微妙香潔な世界と言い、和のとれた安楽

迦さまや親鸞さまがお示しになられることから、人間としての執着から離れた煩悩の一切ないの世界。すべてをそのまま認め受け入れることのできる世界ということで、自分だけでなくすべてのものが仏と成って再会するのですから、他を苦しめたり悩ませたりすることがまったく無い世界ということです。